

つ
たに とばり
吊り橋の 溪に帳の 雲厚く

きゆうすい
このえ
九酔明けぬ 九重の夢

令和七年七月十七日

大中臣正比呂



九重連山を臨む、玖珠川上流の兩岸は断崖絶壁の九酔溪である。

溪を渡す、日本一の「九重夢大吊橋」には、観光客が押し掛けていた。

吊り橋の中ほどには透明なガラス板が張ってあり、下を覗けば足が竦む。

橋からの見事な景観の中に、大小の滝が断崖を落ちており、その水の力を

以って、かつて「九州水力電気株式会社」があったのもうなずける。

秋には更に溪谷が紅葉に染まり、あまりの景色の美しさに酔うことから、

地元の橋本兼太郎という文士が「九州水力」を「九酔」と名付けた。

強風が吹けば橋が揺れ、時折、雲が降りれば雫に濡れる。吊り橋には

ビニール合羽持参で村の高齢者数名が、監視員として配置されていた。